

第3回 「古文書に親しむ(3)」

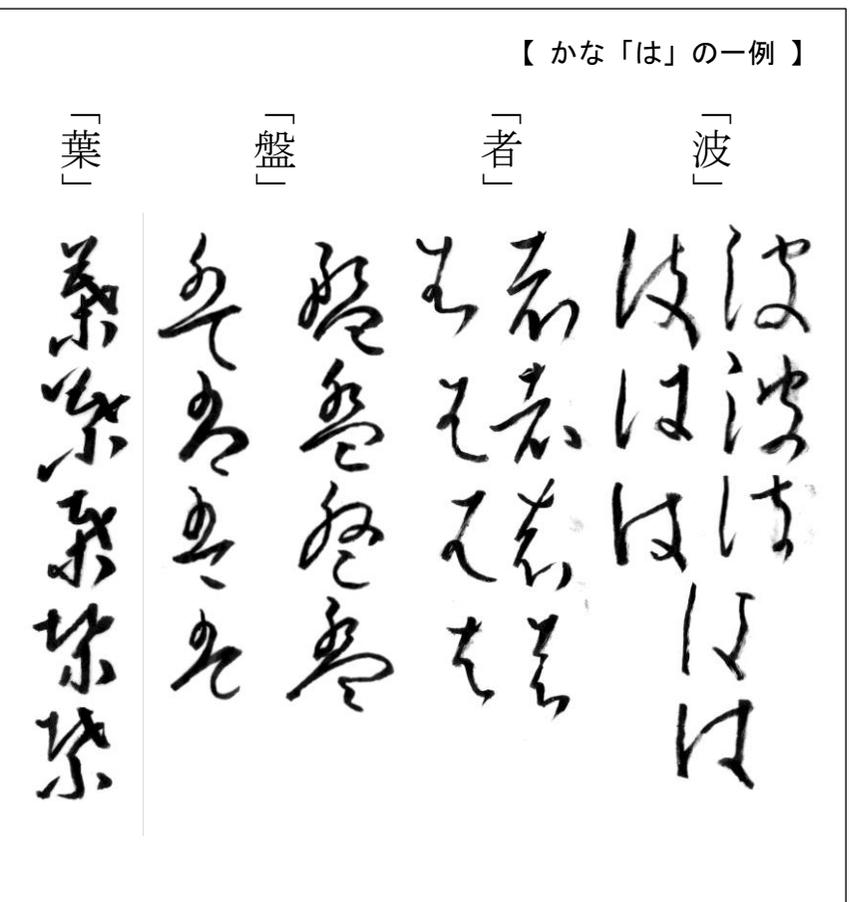
学芸員 海老沼真治

1. 「かな」文字に親しむ

くずし字学習の方法のひとつとして、「かな」のくずし字をおぼえることも重要です。「かな」は漢字がくずれてできた字ですので、例えば「あ」なら、元となった「安」という漢字のくずし方をおぼえることにもつながります。

また、当時は「かな」に一つの漢字だけでなく、複数の漢字が使われていました(現在「かな」として使われる字以外の「かな」を「変体仮名」と呼びます)。

例えば「は」であれば、現在は「波」をもとにした字だけですが、「者」「盤」「葉」などの字も用いられました。



つまり、ひとつの「かな」を学ぶことで、複数の漢字のくずし方をおぼえることができるのです。

ひとつの「かな」に複数の漢字なんて大変そう…と、難しく思われる方もいるかもしれませんが。しかし、現在の私たちも、変体仮名に接していないわけはありません。たとえば、こんなものを見たことはありませんよね？



多くの方は、ここに書かれている文字が「おてもと」であることを承知していると思います。活字にすると「御手茂登」で、この場合「御手」は漢字、「茂登」は変体仮名「もと」で、正確には「御手もと」となります（ただし「手」も変体仮名として読む可能性あり）。

こんな感じで、私たちの身の回りでも、わずかながら変体仮名を見ることが出来ます（すし屋・そば屋は遭遇率高め？）ので、ぜひ親しみながら学んでいただければと思います。

2. 「かな」を読むー江戸時代の版本からー

では、「かな」を学ぶにはどうするかといえば、やはり仮名で記された古文書（資料）を読むということになるでしょう。ただ、古文書は漢字主体で書かれているものも多くありますので、「かな」がたくさん書かれた資料を探す必要があります。

「かな」を多く含む資料の例として…

- ・「古今和歌集」などの和歌
- ・「源氏物語」「土佐日記」などの古典文学
- ・絵巻物の詞書
- ・仮名消息（「かな」で書かれた手紙）

などがあげられますが、取り組みやすさという点からは、「江戸時代の版本」は、庶民向けの比較的読みやすいものが多く、良い教材になると思います。

今回読むのは、武田信玄の様々な事績を記した「甲陽軍鑑」の江戸時代前期の版本（当館蔵、歴-2005-003-005045）です。その中でも、開催中のシンボル展「天津司舞」の由来にも関わる、甲府盆地の湖水伝説について記された部分を読んでみたいと思います。

①

上野城

1111か

②

城より外城の築城

③

之甲列上之築城

④

外城より甲列上

⑤

築城より甲列上

⑥

築城より甲列上

⑦

築城より甲列上

⑧

築城より甲列上

⑨

築城より甲列上

⑩

築城より甲列上

1111か

まず、③前半までを読んでみます。初めは漢字が多いです。

かみでうほう

① 上条法

※本文中に記される「。」は、翻刻文ではすべて「」に置き換えています。

① 上条法

しやうじ

らくくわい

さが

さくげん おしやう

② 城寺には、洛外嵯峨の策諺和尚御座候、此法城寺

② 城寺には、洛外嵯峨の策諺和尚御座候、此法城寺

かうじう

こ

いひ

③ は、甲州上古は湖なりときく、

③ は、甲州上古は湖なりときく、

①行目は本文の3文字すべて漢字です。ふりがなでは最初の「か」が「う」のように見えますが、これは漢字「可」をもとにした変体仮名です。大変頻繁に出てくる字ですので、憶えておくとういでしょう。「しでう」までは今の片仮名・平仮名と同じ、「ほ」は「本」をもとにした字です。

②行目には本文に「には」があります。いずれも変体仮名です。「に」は「尔」を、「は」は「盤」をもとにした字が書かれています。「は」盤については1ページをご覧ください。また中ほどに「の」があります、これは今の「の」と同じですね。ふりがなでは、「わ」王「け」介「が」があります。

③行目には、「は」が2回出てきますが、いずれも同じ「盤」です。最後の「なりときく」は、「と」以外はすべて今の平仮名と同じです。「と」は「登」をもとにした字で、これもよく使われます。

続いて、③～⑤行目を読みます。

③ かみでう ちそう ぼさつ
上条 地藏 菩薩 の

③ 上条地藏菩薩の

④ ちかひ ミなミ
御誓にて、南の山をきりて、一国の水悉 富士川へ

④ 御誓にて、南の山をきりて、一国の水悉 富士川へ

⑤ おつ かつしつ「くちう ひらち くだんの
落るにより、甲州国中平地と成て、今如件也、さ

⑤ 落るにより、甲州国中平地と成て、今如件也、さ

③行目後半部はほとんど漢字で、ふりがなもすでに出てきたものがほとんどです。

④行目の3・4字目「にて」、「に」は②行目と同じ「尔」、「て」は一見すると「く」のようにも見えますが、現在と同じ「天」をもとにした字です。以下の「」をきりて「などは、いずれも現在と同じ字です。ふりがなでは、「悉」に「ことくく」のように書かれています。「こと」は現在と同じ「こ」「と」を合体した形で、よく使われる字です。また「く」が2つ続いたように見えるうち、上の「く」は繰り返しを示すもので、「こと」をもう一度読め、という意味です。これで「ことく」と読みます。

⑤行目の2～5字目「るにより」、「る」「よ」は現在と同じ、「に」は既に何度も出ていますね。「り」は「里」をもとにした字で、今までの字とは異なっています。その後の「と」「て」「さ」は現在と同じ字です。ふりがなでは、「甲州」の「し」は「志」を、「件」の「た」は「多」をもとにした字です。

いかがでしたでしょうか？

慣れないうちは難しいところもあると思いますが、現在と同じ字も多いので、見えたとおりに読める部分も少なくありませんし、文章全体の内容からある程度類推することもできます。あとはくずし字辞典（たいていのものは、「かな」のくずし方の用例も掲載されています）と見比べながら、この「かな」はどんな漢字がもとになっているか、面倒でも一つ一つ調べてみましょう。

では、残りの部分の解読に挑戦してみましょう。

【課題】 3ページ⑥～⑩行目を読んで、翻刻文を左枠内に書いてみましょう。

※各行冒頭の数文字を示しますので、それに続く形で読んでみましょう。

※まだ慣れていない方は、ふりがな・句読点は気にせず、本文の大きい文字だけ読んでみましょう。

※わからない字は無理に時間をかけず、飛ばして先を読み進めてください。

（わからない字数分「○」を書いておくなどしましょう。）

⑥ るに

ほうしやうじ

⑦ 法城寺

⑧ 也、

しうもつしやう

⑨ 州持将

さくけんおしやう

⑩ 策諺和尚

※解答例は次ページにあります。

【解答例】

⑥ でうぢそうだう るによりて上条地藏堂とは申せ共、じかう 寺号をば、

⑦ ほうしやうじ 法城寺と申す、もんじ 此文字は、みつさりてつちとなル 水去土成と云ことハリ

⑧ やふ 也、かうしう 法城寺破れば、すいび 甲州は衰微なり、まつだい 末代までも甲

⑨ しうもつしやう 州持将は、かみでうほうしやうし 此寺上条法城寺を、こんりう 建立有べし、す 此寺に

⑩ さくけんおしやう 策彦和尚 すし 五年の間、住給ひ候、

【全文の大意】

上条法城寺には、京都嵯峨（天龍寺）の策彦和尚を住職に迎えた。この法城寺の由来は、甲州がかつて湖だったとき、上条地藏菩薩の力で南の山をきり開いて、一国の水をすべて富士川に流したことで、甲州の国中地域は広大な平地となったのである。そのような経緯から、上条地藏堂と称する一方、寺号を「法城寺」としたのである。この寺号は、「**水が去って土と成る**」という意味である。もし法城寺が荒廃すれば、甲斐国の衰退につながる。そのため甲斐の国主は、末代まで上条法城寺を造営し、保護しなければならぬのである。この寺に策彦和尚は五年間在住なされた。

このページも漢字多めで、かつ同じ字・語句が繰り返し用いられているので、⑤行目までを振り返りながら、ある程度読めたのではないかと思えます。かなもすでに読んだものが多く出てきましたが、初出のものがいくつかありました。

⑥冒頭「る^ル」によりて…これは「類」がもとになっています。

「に」「り」は既に出た変体仮名。「よ」「て」は現在と同じ平仮名です。

⑥末尾 寺号を「ぼ^ボ」…これは「者」がもとになっています。古文書類にみえる「は」として大変よく使われる字です。

⑦冒頭 法城寺と申「す^ス」…これは「春」がもとになっています。

⑦末尾と云「り^リ」ハリ…④行目「悉」のふりがなにあった「り」と同じで、「り」と「悉」を合体した形です。

⑧冒頭也、法城寺破「れ^レ」ば…これは「連」がもとになっています。す。そのあとの「ば」は⑥行目と同じですね。

⑧末尾 末代まで「も^モ」甲…これは「毛」をもとにしたもので、現在の「も」と同じですが、くずし方で違う字のようにも見えます。「まで」も現在と同じ字です。

これらはいずれもくずし字辞典に用例が載っていますので、辞典をお持ちの方はぜひ調べてみてください。

また、漢字でも頻出する典型的なくずし方をしたものがいくつかありましたので、確認しておきましょう。

⑥ 

「申せ**共**、**寺**号」…「共」は「候得共」「私共」

など、古文書でよく使われる字です。また「寺」もよく使われるほか、「時」「待」など、部首を伴った場合にも同じように書かれることがあります。

⑨行目冒頭「州**持**将は、」もそうです。



⑨ 建立有べし、**有**…

「建立有べし」、「有」も頻繁に使われる漢字で、しかもくずし字を見ても「有」と連想しにくい形です。この字が出たら「有」だと憶えておくとよいでしょう。

⑩ 有給のひん

「有給ひ候」、「有給」は「つる」のように見えますが、これが典型的なくずし方です。「有」に限らず、他の門構えをもつ字も、同じように「有」の部分を「つ」のように書くことが多いです。「有」は「の」を2つ続けたような字で分かり難いですが、版本などでよく目にする形です。

また、前半で読んだ漢字の中で、注意したいくずし字がありました。

② 洛外

「洛外」の「洛」のつくり「各」のくずし方も押さえておくとよいでしょう。「洛」にくさかんむりが付くと…

⑤ 落

「落る」の「落」となります。「洛」の部分はほぼ同じ形です。そして、もうひとつ「各」によく似た字があります。

④ 二国の水

「二国の水」の「水」のくずし方が「各」とほぼ同じです。これは書き間違いではなく、「水」の典型的なくずし方のひとつなのです。こうなると字の形だけみても判断が付きにくい場合がありますので、前後の文意などを含めた判断を刷る必要があります。

このように、「かな」で多くの漢字を学ぶことができ、漢字もひとつの部首やつくりを学ぶことで、同じ部首・つくりを持つさらに多くの漢字を学ぶことができます。一文字一文字を憶えなくても、効率的に？学ぶことができます。います。

江戸時代の版本はこれでひとまず、終了とします。

次に読むのは、シンボル展「天津司舞」に展示中の「七十一番職人歌合」(当館蔵、歴12006-000-000007)です。

「職人歌合」は中世に成立したもので、異なる職種の職人が、互いの仕事の内容に関連させた和歌を詠み、その出来栄えを競う形をとっています。「七十一番職人歌合」は、文字通り71組・142種の職人が歌を詠んでいます。

2ページでお示ししたとおり、和歌は平仮名主体で書かれますので、かなの学習には良い教材になるでしょう。

シンボル展で展示しているのは、天津司舞が田楽に由来するものということから、田楽の舞手が登場する場面です。猿楽師と歌を競っています。

上の写真は、現在展示中の様子です。田楽は全71番中の50番目に登場します。

構成としては、初めに両者の歌が一首ずつ詠まれ、その判定が書かれています。さらにもう一種ずつ詠み、二度目の判定が行われています。

その後に、田楽・猿楽両者の姿が描かれています。

次ページから、歌と判定部分の詞書を読んでいきましょう。

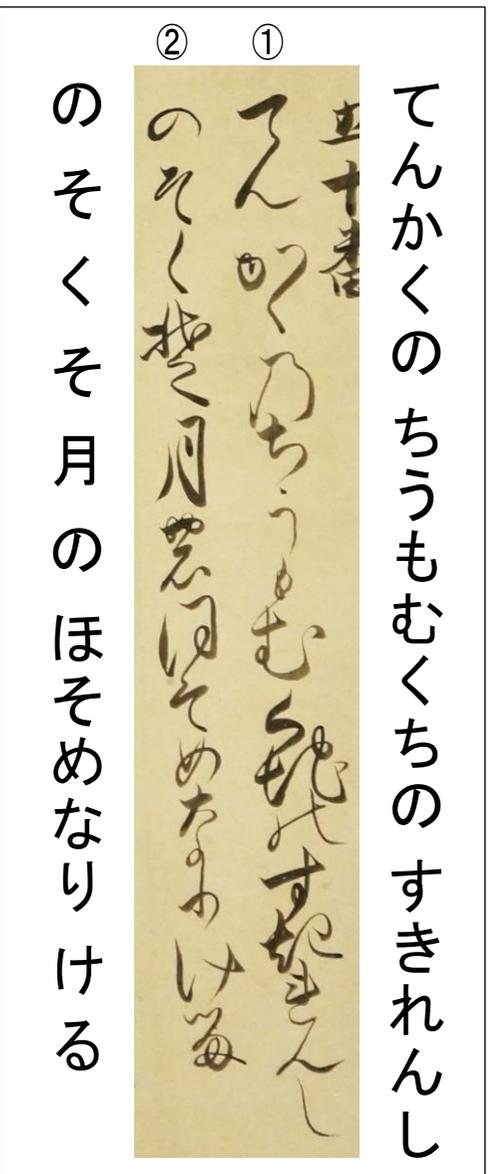


- ⑬
- ⑫
- ⑪
- ⑩
- ⑨
- ⑧
- ⑦
- ⑥
- ⑤
- ④
- ③
- ②
- ①

五十番

① へんりつちうもむらねすねんし
 ② のそくせき月雲何そめちあけぬ
 ③ 秋の霜たふれらるるあつじ雲れ
 ④ 果菜花あつじ月とみるね
 ⑤ 左首尾つひひねり右より事端
 ⑥ 心元もつゝ長秋月足海とんか波
 ⑦ あり勝たつゝ心もさ可勝
 ⑧ こそ海てもけみそあつさあまね乃
 ⑨ 木はひひつゝ老をさるじいしな
 ⑩ 無一様くむらじやまね水あいに冠者
 ⑪ ういりや 音たぬくとみえんや
 ⑫ 左ねとふ我道乃すゝさうあて恋と
 ⑬ こそあつゝ心はさつちい何の持

最初に「五十番」とあり、次の行から歌が始まります。歌は、田楽、猿楽の順で読まれています。まずは歌の部分①～④を読んでみましょう。



②の5字目「月」を除いて、すべて平仮名です。しかもその多くは、現在と同じ平仮名の形で書かれています。変体仮名は以下のとおりです。

①2回目に出てくる「ち」は「地」がもとになっています。またその下の「の」は「能」をもとにしており、よく使われる変体仮名です。その2字下「き」は「起」をもとにしたもの。「れ」は「連」をもとにした字で、これは前に読んだ『甲陽軍鑑』にも出てきました(8ページ)。

②4字目の「そ」は「楚」をもとにしたもの。その2字下の「の」は「農」をもとにした字です。他はすべて現在と同じ平仮名です。最後の「る」は一見すると現在の「る」には見えませんが、同じ「留」がもとになっており、くずし途中のような形です。

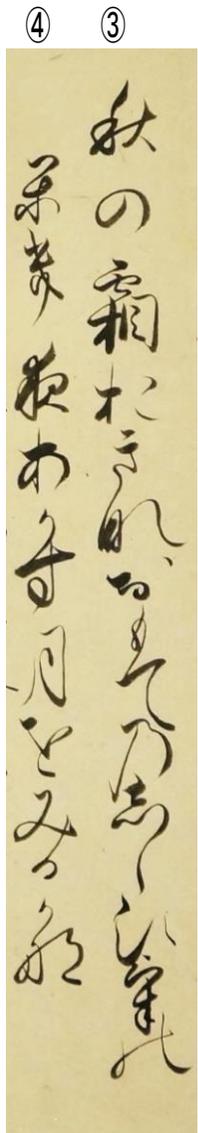
①②の和歌を漢字を補って読むと

でんがく ちうもんぐち すきれんじ
「田楽の 中門口の 透櫛子 のぞくぞ月の 細め成りける」

となります。歌の詳しい内容については、今回は触れられませんが、「月見」をテーマに、田楽の要素を盛り込んだ歌となっています。

つづいて③④猿楽師による歌です。

秋の霜 おきなおもてのしらひけの



(な欠)かき夜あかす月をみるかな

③の「秋」「霜」、④の「夜」「月」以外はすべて平仮名です。

③ 6字目「な」は「那」がもとになっています。これは④末尾の「な」も同じです。下から5字目の「し」は「志」をもとにした字で、『甲陽軍鑑』にも何度か出てきました(5ページほか)。末尾の2字「け」は「氣」を、「の」は①と同じ「能」をもとにした字です。

④冒頭の2文字「か」は「閑※」をもとにしたもの。「き」は変わった字に見えますが、「幾」をもとにした字で、現在の「き」と同じです。また5字目の「か」は「可」をもとにしたもので、『甲陽軍鑑』でもよく使われていた字です。

※当日配布資料から訂正しました。

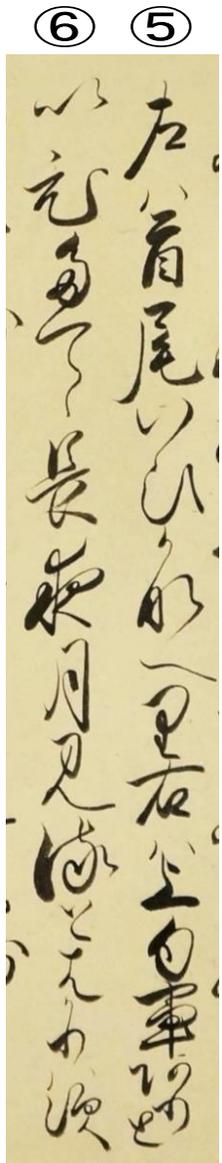
③④の和歌を漢字を補って読むと

「秋の霜 翁^{おきな}面^{おもて}の 白髭^{しらひげ}の 長き夜明かす 月を見るかな」

となります。

この後に、両者の歌の判定が行われます。その内容が次ページのものです。

左ハ首尾いひかなへり、右ハ上句事あり
と



いひたてよ、長夜月見るとはかりハす



こしす急よハくきこゆ、左可勝

すでに何度も出てきた文字が多くなってきました。ここでは初出の変体仮名のみご説明します。

⑤下から3字目「あ」は「阿」がもとになっています。現在の「あ」安」とともに、よく使われる字です。

⑥2字目「ひ」は「飛」がもとになっています。その次の「た」は「多」をもとにしたもので、『甲陽軍鑑』で何回か出てきています（5ページほか）が、こちらの方がもとの漢字をより残した形になっています。下から6字目「る」は「流」を、末尾「す」は「須」をもとにした字です。

⑦3字目「急」は「衛」がもとになっています。通常は「恵」をもとにした字ですが、こちらでも使われます。なお下から3字目「左」は、ここでは漢字として使われていますが、平仮名「や」で用いられることもあります。

この3行を現代の漢字仮名遣いで示すと

「左は首尾言い叶えり。右は上句事ありと言い立てて、長夜月見るとばかりは少し末弱く聞こゆ。左勝べし」

となります。この勝負は左〓猿楽の勝ちとなりました。

この「七十一番職人歌合」は、比較的丁寧に筆写されたもので、『甲陽軍鑑』などの版本とは書体がかなり異なるように見えますが、使っている文字の多くは共通していることがわかります。

では、残りの部分の解説に挑戦してみましよう。田楽と猿楽による和歌勝負第2ラウンドです。今度は「恋」をお題とした歌で競っています。

【課題】 11ページ⑧～⑬行目を読んで、翻刻文を左枠内に書いてみましょう。

※各行冒頭の数字文字を示しますので、それに続く形で読んでみましょう。
※わからない字は無理に時間をかけず、飛ばして先を読み進めてください。
(わからない字数分「○」を書いておくなどしましょう。)

⑧ よそへ

⑨ おほ

⑩ 恋

⑪ うつ

⑫ 左右

⑬ よせ

※解答例は次ページにあります。

【解答例】

⑧ よそへても けにそ恋しき 人まねの

⑨ おほひかつらの おんなすかたを

⑩ 恋られて むくひやすると ゑめい冠者

⑪ うつくしけなる 人とみえハヤ

⑫ 左右ともに我道のすかたをかりて恋を

⑬ よせたる心はせやさし 仍為持

【漢字・現代仮名遣いによる表記例】

⑧ よそえても げにぞ恋しき 人真似まねの

⑨ 覆鬢おおいかつらの 女姿を

⑩ 恋られて 報むくいやすると 延命冠者えめいかじや

⑪ 美うつくしげなる 人と見えばや

⑫ 左右、ともに我道わがみちの姿を借りて、恋を

⑬ 寄せたる心こころばせ優じし、仍て持とす

いかがでしたでしょうか？最初に読んだ時より読める字が増えたと実感できたとしたら、本講座はひとまず成功です。また、今はあまり読めなかったとしても、古文書読解はまさに「継続は力なり」ですので、少しづつでも続けて読んでいただければと思います。

最後に、⑧〜⑬で初出の変体仮名についてご説明します。

⑧ 3字目「へ」は「遍」を、7字目「に」は「丹」を、下から2字目「ね」は、現在と同じ「祢」を、それぞれもとにしています。

⑩ 3字目「れ」は「禮」がもとになっています。

⑬ 7字目「せ」は「を」のようにも見えますが、現在の「せ」と同じく「世」をくずした字です。その2字下の「ち」は「佐」がもとになっています。

なお、⑨ 6字目・⑩ 2字目「ら」は、「し」とほとんど区別がつきません（私も最初間違えました）。これは③にも出てきており、この写本ではこの形が書かれているようです。すべてがこの書き方になるわけではありませんが、このように非常に簡略化される場合もありますので、前後の文意などから慎重に判断する必要があります。

今回は以上です。「七十一番職人歌合」は、時間と紙面の都合上、歌の内容や個々の職人についてはご説明できませんでした。詳しくお知りになりたい方は、以下の図書をご覧くださいと思います。

- ・新日本古典文学大系61『七十一番職人歌合 新撰狂歌集 古今夷曲集』（岩波書店、1993年3月）
- ・網野善彦『職人歌合』（平凡社ライブラリー、2012年5月）

また、最後に自習用の「腕試し問題」として、「七十一番職人歌合」の別の場面をあげておきますので、ぜひ挑戦してみてください。正解例は後日博物館のホームページ・ツイッターでお知らせします。本日はお疲れさまでした。

腕試し問題は、第七番、「油売り」と「餅売り」による対決です。

【腕試し問題】 11ページ①～⑧行目を読んで、翻刻文を左枠内に書いてみましょう。

※次ページに各行冒頭の数字を示しますので、それに続く形で読んでみましょう。

※今回説明しなかった字も含まれています。わからない字は無理に時間をかけず、飛ばして先を読み進めてください。

(わからない字数分「〇」を書いておくなどしましょう。)

七番
よしとぶとをさしはらふあひは
物集て乃とみ家屋まはるは
見わすゆたも秋を回乃ものゆらあ
たはまろーうたはうまは
たすく徳とみかこさくはか
あつはるあまあまのあま
いふら井まふらあまのあ
あまのあまのあまのあ

① よひ

② ふ

③ 見

④ おほ

⑤ 左歌

⑥ あふ

⑦ いな

⑧ もちゐ

【腕試し問題】の解答例は、後日博物館のHP・ツイッターに掲載しますので、
答え合わせをしてみてください。